

アフリカ宗教研究の動向と課題

— 周辺化理論と近代化論の限界をこえて —

石 井 美 保

- I はじめに
- II アフリカ宗教の周辺化理論 —— 剥奪理論と象徴的抵抗論
 - 1 憑依現象と剥奪理論
 - 2 独立教会と象徴的抵抗論
 - 3 周辺化理論の問題点
- III アフリカ宗教の近代化論
 - 1 ポスト植民地期のペンテコステ派教会研究
 - 2 近代化論の問題点
- IV おわりに

I はじめに

本論の目的は、サハラ以南アフリカの宗教実践を対象とする人類学的研究について、主に 1960 年代後半以降の研究動向を整理し、その問題点を指摘するとともに新たな視座の可能性を提示することである¹⁾。大まかにまとめれば、従来のアフリカ宗教研究の問題領域は次のような変遷を遂げてきた。1) 地域社会の伝統宗教とコスモロジー、2) 植民地化と近代化による伝統社会の崩壊と新たな宗教運動の形成、3) ポスト植民地期のアフリカ社会における宗教現象のグローバル化。

以上のような研究対象の変遷に伴い、アフリカ宗教研究の主流を占める理論的枠組みもまた、伝統宗教の構造機能的解釈と象徴分析から、新たな宗教運動の政治的意義の理論化を経て、世界システム論に依拠した宗教現象の近代化論へと移行してきた²⁾。本論は、上記の理論的潮流に連なる 1960 年代以降のアフリカ宗教研究のなかでも、つぎの二つの問題領域に焦点をあてて検討する。第一に、社会的周辺部にある人々を主体とする宗教実践を、不平等な権力構造との関係から分析した一連の研究である。本論ではこれらの議論をアフリカ宗教の「周辺化理論」と呼び、伝統社会と植民地状況のそれぞれを対象とする代表的な周辺化理論を検討する。

第二に、現代アフリカ社会における宗教実践を、国民国家形成と近代化、グローバル化との関係から分析した一連の研究である。本論ではこれらの議論をアフリカ宗教の「近代化論」と呼び、ポスト植民地期のアフリカ社会を対象とする代表的な近代化論の特徴と問題を考察する。

本論の第2章では、代表的な周辺化理論として、伝統社会における憑依現象を憑依者の構造的周辺性という点から機能的に分析したルイス [Lewis 1966] の剝奪理論 (deprivation theory) と、独立教会の実践を被抑圧者の象徴的抵抗として分析したコマロフ [Comaroff 1985] の研究をとりあげる。また、周辺化理論に付随する問題として、構造的弱者の宗教実践をめぐる解釈の問題を指摘する。第3章では、ポスト植民地期のアフリカ社会におけるペンテコステ派/カリスマ教会の発展を分析したギフォード [Gifford 1994, 1998] を中心に、アフリカ宗教の近代化論を検討する。また、アフリカ社会の宗教実践をローカルな伝統宗教からグローバルな世界システムと宗教への発展的移行とみなす近代化論の前提に対して、レンジャー [Ranger 1993] に基づき代替的な見地を示す。第4章では、従来の周辺化理論と近代化論の問題点をふまえ、アフリカ宗教研究に求められる新たな視座の可能性を模索するとともに、今後の具体的な研究課題を提示する。

II アフリカ宗教の周辺化理論 —— 剝奪理論と象徴的抵抗論

1 憑依現象と剝奪理論

本節では、憑依現象の意味を伝統社会における構造的不平等性という点から機能的に分析し、周辺化理論の基礎を築いたルイス [1966] の剝奪理論と、後続の研究者による剝奪理論の批判的展開を紹介する。

ルイスはまず、エリアーデ [Eliade 1951] のように憑依現象をパフォーマンスとしてのみ分析するのではなく、むしろエヴァンズ=プリチャード [Evans=Pritchard 1937] がアザンデ (Azande) 社会の妖術研究において行ったように、憑依現象の社会機能的側面に着目すべきであると主張する。この視座に基づき、ルイスは北東アフリカのソマリ女性を主体とする憑依現象を分析している。父系ムスリム社会である伝統的なソマリ社会では、女性はイスラーム教の教団から排除されており、かつ一夫多妻婚や離婚などの様々なストレスに晒されている。女性のストレスは精霊憑依として発現し、憑依された女性は精霊の要求として男性からの贈り物や配慮を獲得することによって一時的に日常的な抑圧状態を解消する。つまり、ソマリ社会の憑依現象は、男性中心的な社会構造において周辺的存在である女性の欲求充足手段として機能しているというのが、ルイスによる剝奪理論の骨子である。

以上のように、ルイスが提起した古典的な剝奪理論は、中心と周辺の不平等な関係性が比較

の明確で安定している静態的な社会構造についてよくあてはまる。しかし、社会変化が激しくアノミー的な状況にある社会においてはどうか。後続の研究者はこの見地から、社会変動期の憑依現象を分析している³⁾。そのなかでもケニヨン [Kenyon 1995] は、スーダンの憑依カルトであるザール (Zaar) を都市化に伴う社会変化との関係から検討している。ケニヨンは、憑依現象を社会的周辺部にある女性にとっての治癒的な吐き口とみる従来の剝奪理論に対して、精霊憑依は女性による知識やメタ言語の積極的な伝達手段であると述べる。1970年代以降のスーダンでは男性の出稼ぎが増加し、地方に取り残されて経済的に困窮した女性たちは都市へと移住した。都市への移住と多民族の混交という新たな状況におかれた女性にとって、ザール・カルトは女性同士の連帯と相互扶助の場を提供した。日常生活の困難や社会変化に伴う新たな問題をザールの言葉で解釈し、伝達することによって、女性たちは独自の知識と経験を共有する新たな共同体を形成しえたのである⁴⁾。

同じく、都市化と近代化との関係から憑依現象を分析した研究として、マダガスカルを調査地とするシャープの研究 [Sharp 1990] が挙げられる。シャープは、就学のために都市へ単身移住した女子学生の間で生じた精霊憑依について、彼女たちの民族的周辺性や経済的不安定さ、孤立と疎外体験を憑依発現の社会的要因として挙げている。またシャープは、伝統的な憑依形態であるトロンバ (*tromba*) と新たな憑依現象であるンジャリニンツィ (*Njarinintsy*) を比較し、歴史的人物による既婚女性への憑依であるトロンバには特定の儀礼と社会的尊敬が与えられるのに対して、ンジャリニンツィを解釈するための社会的コンテクストは確立されておらず、犠牲者である患者の治療のためには親族の協力と励ましが不可欠であると指摘している。

ここまで、憑依現象を主題とする周辺化理論を概観してきた。ルイスの提起した剝奪理論は、構造的弱者の宗教実践を抑圧状況の一時的解消手段として機能的に分析する理論的枠組みを用意した。また、不可逆的な社会変化と宗教実践の動態性を考慮した近年の研究では、憑依の主体を社会的周辺部に位置づける新たな要因として、伝統社会の権力構造にかわって都市社会における疎外状況が指摘されている。ただし、このときケニヨンのように憑依現象の意味を抑圧からの脱却手段として積極的に評価するにせよ、あるいはシャープのように新たな抑圧状況の表出として解釈するにせよ、「憑依現象がなぜ、この集団において生起するのか」という根本的な疑問については、やはり当該集団の社会的周辺性という点から機能的に説明されている。したがって、流動的な都市社会を対象とする近年の研究もまた、依然として剝奪理論の枠組みの中にあるといえる。

2 独立教会と象徴的抵抗論

伝統社会を対象としたルイスの剝奪理論に対して、より歴史的かつマクロな政治的視座から周辺化理論を発展させた重要な研究分野として、1950年代から1960年代に興隆したメシアニ

ズムと独立教会研究 [Balandier 1955; Lanternari 1963; cf. Worsley 1968] が挙げられる。さらに 1980 年代以降には、植民地状況における宗教運動の政治的意義を論じた先行研究の流れを継承しつつ、象徴や儀礼行為のもつ潜在的な抵抗としての意味に着眼した研究 [Comaroff 1985; Lan 1985; Stoller 1995; cf. Taussig 1980, 1987] が発展した。本論では、構造的弱者の宗教実践を支配権力に対する象徴的な抵抗として分析した一連の議論を「象徴的抵抗論」と呼び、コマロフ [1985] を中心にその論理展開と問題点を検討したい。

コマロフ [1985] は、南アフリカ共和国の独立教会を対象として、抑圧状況にある民衆が癒し (healing) や儀礼、ダンスなどの宗教実践を通して社会を変革する主体性を形成していく過程を論じている。彼女はまず、南アフリカ共和国のツィディ (Tshidi) 社会について、前植民地期の社会形態を描写することからはじめる。伝統的なツィディ社会では年長男性を中心とする父系の政治システムと、女性を中心とする家空間に表される母系性が調和を保っていた。また、コマロフは割礼や歌、踊りの象徴分析を行い、ツィディ社会における「男/女」「乾/湿」「社会/野生」といった二項対立的なコスモロジーを提示する。彼女によれば、伝統的なツィディ社会では種々の儀礼はコスモロジーと整合した社会秩序を具現化し、個人の社会集団への統合を可能としていた。

つづいてコマロフは、植民地化による社会変化と旧秩序の崩壊過程を描写する。宣教団の侵入と新たな灌漑農法の普及による生産様式の変化、賃労働の開始と原住民のプロレタリア化、そして市場経済化といった一連の社会変化によって、ツィディ社会を支えてきた伝統的なコスモロジーと構造のバランスは崩壊の危機に晒された。この危機的状況への対抗手段として、コマロフはツィディ社会におけるザイオン (Zion) 教会の台頭に着目する。彼女によれば、癒しや食物禁忌、制服の着用をはじめ身体性を重視するザイオン教会の実践は、近代的な言語と伝統的象徴との混淆によって失われた社会秩序と権威を回復する手段である。コマロフはザイオン教会で使用される衣服や色彩、儀礼の象徴分析を行い、これらの実践を高度に暗号化された象徴的抵抗の表現として論じている [Comaroff 1985: 195]。

コマロフの議論に代表されるように、1980 年代以降に発展した象徴的抵抗論は次のような論理展開を特徴としている。1) 一貫した社会秩序とコスモロジーを有する伝統社会の存在、2) 宣教と植民地化、市場経済化を契機とする伝統社会の崩壊、3) 伝統文化と西欧文化との混淆による伝統的秩序の創造的な回復と抵抗。

以上の論理展開をもつ象徴的抵抗論は、社会変化や抑圧状況において宗教実践が果たしうる柔軟で革新的な可能性を提示している点できわめて重要である。しかし、象徴的抵抗論は歴史変化と宗教の動態性を重視しながらも、あくまで文化的・象徴的な形態をとるとされる「抵抗」の存在基盤を示すために、共時的な象徴分析に依拠せざるをえない。また、近年の憑依研究と同じく象徴的抵抗論もまた、新たな社会状況に対する民衆の対応を積極的に評価している

が、人々の宗教実践を「中心－周辺」という構造的な不平等性に基づいて機能的に解釈しているという点で、ルイスの提起した剝奪理論を継承しているといえる。

3 周辺化理論の問題点

ここまで、ルイスの提起した剝奪理論とコマロフによる象徴的抵抗論を中心に、周辺化理論の論理展開を概観してきた。本節では、周辺化理論に付随する問題点を考えていきたい。もっとも重視すべき問題点のひとつは、構造的弱者の宗教実践に対する分析者の解釈をめぐる問題である。

まず、ルイスによる精霊憑依の分析をふりかえてみよう。彼によれば、社会的周辺部にあるソマリ女性は憑依を通して男性から贈り物や配慮を得ることで日常的なストレスを解消している。しかしこのとき、ソマリ女性と男性の相互交渉は観察者による多様な解釈を可能にすることに注意すべきだろう。精霊憑依は一方で、男性中心の権力構造に対する女性の間接的な抵抗であり、権力関係を操作する手段としてとらえることができる。この場合、ソマリ女性は日常的な現実の分節化とは異なる「超自然的な現実」の位相を示し、そこに集団で参与することによって間接的に日常の権力構造を批判する。この解釈はコマロフをはじめとする象徴的抵抗論に通底するものであり、さらに都市ザール・カルトを対象とするケニョンの分析は、象徴的な抵抗が組織化され、抑圧的な状況を改変していく可能性を示している。

しかし他方、超自然的な宗教実践は個人的で自己充足的な傾向をもつために、社会構造の根本的な改革にはつながりえないとも考えられる。たとえば、憑依された女性に贈り物を与えるという男性の行為は必ずしも女性への譲歩を意味するものではなく、男性は女性の不満を解消する安全弁として憑依と贈与のサイクルを保つことによって、戦略的に男性優位の権力構造を維持しているという解釈が可能である。

以上のように、抑圧状況の一時的解消を可能とする宗教実践の存在そのものが、結果的に不平等な権力構造の維持に貢献するという問題について、ショッフエラー [Schoffeleers 1991] によるコマロフ [1985] への批判をもとに考えてみたい。彼はザイオン教会における癒しの重視と政治活動の回避という特徴の相関性に着眼し、コマロフの問題点をつぎのように整理している。1) コマロフが主張する「抵抗」の適用範囲は広すぎてほとんど意味をなしていない。彼女が「象徴的抵抗」として解釈している衣服や色彩などの使用法は、西欧文化への迎合として読み取ることも可能である。2) ザイオン教会信者の抵抗は他のアフリカ人同胞にも向けられていた。3) コマロフはザイオン教会と南アフリカ共和国政府との明かな協力関係について言及していない。4) たとえザイオン教会の実践が政府に対する文化的抵抗を含んでいたにせよ、そのことは政府と教会との政治的な協力関係を排除するとは限らない。つまり、「敵意あ

る協調」という関係がありうる。5) コマロフは癒しのもつ両義的な効果に配慮していない。癒しはたしかに象徴的な抵抗となりうる一方で、より実効的な政治批判力や政治活動を減退させる。

ショッフエラーの提起した批判点のうち、とくに最後の点は構造的弱者による宗教実践の両義性を指摘している点で重要である。ザイオン教会は一般に政治との関わりを避け、政治活動からの撤退を正当化する傾向にあったが、ショッフエラーはこれについてザイオン教会の「敬虔な性質 (pietistic character)」という点から説明を試みている。彼によれば、癒しの行為は様々な問題を個人の次元に還元し、非政治化する傾向をもつために、癒しを重視するザイオン教会は政治的役割から遠ざかっていたのである。またショッフエラーは、疾病の診断とラベリングによる社会的排除と、癒しによる社会への再統合機能に注意を促す。つまり、何らかの問題が疾病という「個人的異常」として認識され、患者の社会適応と再統合が目指されるかぎりにおいて、社会構造自体の矛盾が問題化されることはない。したがってザイオン教会や憑依カルトが行っているように、身体的な不調や異常として発現した諸問題を個人的な「疾病」や「信仰」の次元で処理し、政治社会状況に関わる語彙と区別することによって、当の問題を生みだした社会構造は温存されるのである。

先述したように、古典的な剝奪理論は構造的弱者を主体とする宗教実践を機能的に説明する説明原理を提供しえた。また、植民地期の宗教運動研究の流れをくむ象徴的抵抗論は、構造的弱者の宗教実践がもつ潜在的で柔軟な抵抗の可能性を提示した。しかし、以上の周辺化理論には、宗教実践の意味と主体の立場をめぐる解釈学的問題が常に付随する⁵⁾。さらに重要な問題として、構造的弱者の宗教実践に現状改革と抵抗の可能性をみる近年の周辺化理論は、分析者自身が宗教実践の「周辺性」に着目し、実践の主体を「構造的弱者」と意味づけることを通して、常になんらかの絶対的な権力構造と「中心-周辺」のカテゴリーを設定し、あるいは分析者自身が創造してしまうという循環論的な矛盾に陥っている⁶⁾。

以上のように、周辺化理論はアフリカ社会における宗教実践の理論化に多大な貢献を果たす一方、機能的分析に常に付随する、宗教実践のカテゴリー化と意味づけをめぐる解釈学的問題を解消していない。この周辺化理論の視座にかわって、ポスト植民地期のアフリカ宗教研究は新たな展開をみせている。すなわち、アフリカ社会の宗教実践を国民国家形成と近代化、グローバル化との関連から説明する近代化論である。

Ⅲ アフリカ宗教の近代化論

1 ポスト植民地期のペンテコステ派教会研究

近年、ポスト植民地期のアフリカ諸国におけるペンテコステ派／カリスマ教会の急速な成長が報告されている。新たな教会運動を主題とする研究には、従来のアフリカ宗教研究とは異なる傾向がみられる。すなわち、民衆の宗教実践を伝統社会の成員に共有されたコスモロジーの表現としてみるのではなく、あるいは構造的弱者による抑圧の解消や象徴的抵抗の手段として解釈するのでもなく、国民国家形成と近代化、そしてグローバル化との関係から分析する傾向である⁷⁾。

本論ではアフリカ宗教の近代化論について、ギフォード [1994, 1998] を中心に検討する。はじめに、アフリカ諸国におけるキリスト教会の現状をマクロな視野から比較検討したギフォード [1998] を参照したい。彼は、なぜ現在アフリカ社会でキリスト教が発展しているのか、また教会はどのような公的役割を果たしているのかという問題を中心に社会経済的な分析を試みている。

ギフォードはまず、多くのアフリカ国家の特殊な成立状況を指摘する。すなわち、アフリカ諸国の国家形成は植民地主義の遺産であり、国境や民族集団は人為的に線引きされ、中央集権型の支配構造が形成された。以上の成立経緯をもつアフリカ国家の特徴は、「新一世襲主義 (neo-patrimonialism)」 [Gifford 1998: 5] である。ヴェーバーの示したような合理的・合法的権威としての近代国家モデルと比較すると、多くのアフリカ国家は近代国家の体裁をとりつつも、その内実は公私の区別がきわめて曖昧であり、中央政府から地方共同体にいたるまで賄賂とコネが横行している。西欧の近代国家が歴史的・経験的に獲得されてきたのに対して、多くのアフリカ国家は実体的な機能を十全に果たしていない。こうした国家の機能不全を背景に、アフリカ諸国では教会を筆頭として宗教組織の果たす社会的役割が重要化している。

つぎにギフォードは、ガーナをはじめとするアフリカ諸国の教会活動を比較検討する。ガーナでは宣教団を中心とする主流派教会が衰退するにつれて、信仰福音 (Faith Gospel) に基づき現世利益の追求を提唱する新たなペンテコステ派教会が興隆した。鉱山開発によって白人の入植と都市化が進んだザンビアでは、ペンテコステ派宣教団と政府が連携する傾向にある。カメルーンでは、キリスト教として最大の規模をもつカソリックとムスリム・エリートとの拮抗関係がみられる。

またカソリック、プロテスタント、ペンテコステ各教派を比較した場合、カソリック教会は宣教団の果たす役割がいまだに大きく、使節の交換や欧米のエージェントを通じた人権教育や民主化教育などの開発支援・近代化・啓蒙活動を行っている。主流派プロテスタント教会は北

米やニュージーランドの教会をスポンサーとして活動している。とりわけ冷戦後の注目すべき現象は、アメリカ合衆国に拠点をもつペンテコステ派宣教団の目覚ましい活動である。この現象についてギフォードは、合衆国と結びついた宣教団による福音主義のもたらす「パラダイム推進力 (paradigm-enforcing power)」[Gifford 1998: 316] の効果を指摘している。すなわち、多くのアフリカ社会においてキリスト教徒として習熟することは社会的地位の上昇に結びついており、一部の教会はビジネス学校としての機能を果たしている。このように経営戦略と規模、マーケティング等の商業的要素に還元されたキリスト教は、西欧的な価値観と合衆国文化の浸透を促している。

教会活動の実利性と信者の上昇志向という特徴に加えて、ペンテコステ派/カリスマ教会は先にみたザイオン教会と同じく、現行の政治経済システムの不平等性を糾弾しないという傾向をもつ。信者の抱える困難は「悪魔、聖霊、救済」などの宗教的語彙によって解釈され、信者は政治経済的な改革を求めるよりも、むしろ既存の権力構造を肯定した上で社会的地位の上昇を果たす手段を画策する。この意味で現代アフリカにおけるペンテコステ派/カリスマ教会は、現世の否定と崩壊による救済を求める千年王国運動や終末思想とは異なり、より個人主義的な傾向を示している。

以上の問題と関連してギフォード [1994] は、1990年代以降ガーナの首都圏で発展している新たなペンテコステ派/カリスマ教会 (New Charismatic Churches: 以下「新カリスマ教会」と呼ぶ) を対象に、教会の社会的機能をよりミクロな視点から分析している。彼によれば、新カリスマ教会の主な活動と特徴はつぎのようにまとめられる。① 成功を可能にする近代的な自己イメージの確立、② 教会メンバー同士の結婚仲介、③ 著書やテープ販売など各種メディアを利用した宣伝活動、④ 欧米を中心とする海外との結びつき。

新カリスマ教会の指導者はいずれも音楽を重視した礼拝を行い、信者に対する福祉やカウンセリングを実施している。新カリスマ教会では「成功と健康と富」の実現を目指す観点から信仰福音が説かれ、聖書解釈がなされる。また、新カリスマ教会が主張する「救済」は実利的で現世利益的な意味をもち、教理の中で「自信と誇り」「想像力と技能」のように、社会経済的成功を実現するための近代的メンタリティが伝授される。さらに、新カリスマ教会は信者の海外渡航を支援する役割を果たしており、教会の特長として国際性と近代性が喧伝されている。

ファン・ダイク [van Dijk 1997] もまた、ガーナの新カリスマ教会による国際的なネットワークの形成と信者の欧米移住との関係を分析している。彼によれば、1940年代から50年代は宣教団に基礎をもつキリスト教が「アフリカ化」された時代であり、教会の実践において精神的癒し (spiritual healing) や祖先崇拝、土着的象徴が重視されるという混淆的な状況が生じた。1970年代になると、「カリスマ的」と呼ばれる新たなペンテコスタリズムが起こったが、このとき教会活動の中心となったのは中産階級の社会経済的成功を支援することであった。や

がて新カリスマ教会は、国際的なネットワークを介して人・物資・情報が移動するチャンネルとしての機能を果たすことになる。ファン・ダイクはガーナとオランダの新カリスマ教会における信者の「送り出し」と「受け入れ」の機能を次のように分析している。

① ガーナのペンテコステ派教会では、カリスマ的な指導者による儀礼や祈禱に基づく問題解決と病気治療が行われている。また、パスポートやビザの取得祈願をはじめ個人の海外渡航に必要な準備の支援活動が行われている。② ガーナ人移民によって形成されたオランダのペンテコステ派教会は、新たなガーナ人移民の受け入れと世話を請け負っている。教会は新移民が西欧の国民国家に適応するよう支援し、ビザや証明書の取得、職業斡旋、警察との折衝などを代替する。ペンテコステ派教会は移民を斡旋する仲介役として機能しており、信者の保護とアイデンティティを保証する巨大な「ペンテコステ家族」を形成している。

最後に、ガーナとナイジェリアのペンテコステ派教会によるメディアの利用を分析したハケット [Hackett 1998] の研究を参照したい⁸⁾。彼女は、ペンテコステ派教会が利用する各種のメディアは信者によって消費される一種の大衆文化であり、宗教的な公共空間として機能していると述べる。ガーナとナイジェリアにおける新たなペンテコステ派教会の発展の背景には、経済危機と構造調整政策の影響がある。ハケットによれば、ペンテコステ派／カリスマ教会は世俗化に抗して宗教的権威を維持するために再生 (born again) の意義を強調する一方、「進歩と近代化」を旗印とする目的合理主義的主張を掲げ、伝統と因習を否定することによって都市エリート青年層の圧倒的な支持を得た。さらに、ペンテコステ派教会はテレビやラジオを利用した宣伝活動 ('televangelism') を通して信者の増加をはかり、メディアによって媒介された「宗教的大衆」という幻想の共同体を形成することに成功したのである⁹⁾。

2 近代化論の問題点

以上みてきたように、ペンテコステ派／カリスマ教会を主題とする近年の研究は、ポスト植民地期のアフリカ社会における宗教実践の新たな動向と社会的役割を示唆している。すなわち、ファン・ダイクやハケットが指摘するように、ペンテコステ派／カリスマ教会の活動は地域レベルの宗教実践と世界システムとの密接な関連を示している。また重要な点として、宗教実践の担い手にみられる変化を指摘することができる。つまり、新たな教会の発展を支える都市中流層は、伝統的な宗教体系を所与のものとして継承するのではなく、あるいは外来宗教に対して伝統的秩序とコスモロジーの再構築による象徴的抵抗を試みるのでもなく、むしろ旧来の「伝統」からの脱却と社会経済的成功の手段として、グローバルな紐帯をもつペンテコステ派／カリスマ教会への参与を積極的に選びとっているのである。

しかしながら、ペンテコステ派／カリスマ教会研究を従来のアフリカ宗教研究の流れに位置づけてみたとき、その理論的な偏向に気づかざるをえない。大まかにまとめれば、これまでの

アフリカ宗教研究は、1) 伝統的地域社会における農耕・牧畜民の民間信仰と儀礼、2) 社会経済変化に晒された地域社会と都市的状况における小農と賃労働者の宗教運動、3) ポスト植民地期のアフリカ諸国における新興エリート層のグローバルな教会活動というように、対象となる地域と集団の規模、および社会階層を推移させてきた。以上のような研究対象の変遷は、たしかに多くのアフリカ社会がたどった政治経済変化の一部を反映しており、アフリカ宗教の近代化論はその最新局面に対応しているといえる。

しかし、伝統社会の構造機能的分析から近代化論に至る先行研究の主題と対象領域の変遷そのものが、アフリカ宗教研究の多くが共有してきた理論的前提の問題性を露呈している。その前提とは、静態的な地域社会の伝統宗教から植民地化による伝統宗教の破綻と象徴的抵抗による再創造を経て、西欧を首座におく近代世界システム/宗教への参画に至るアフリカ宗教の発展的移行モデルである。それでは、先行研究が暗黙のうちに前提としてきた発展的移行モデルを乗り越えるためには、どのような視座が必要とされるのだろうか。

この問題について、レンジャー [Ranger 1993] は新たな考察の可能性を指し示している。彼によればアフリカ宗教研究の多くはこれまで、前植民地期のアフリカ社会を小規模で閉鎖的な伝統社会として想定してきた。この見地では、祖先崇拜と親族構造によって結びついた静態的な「マイクロコスモス」としての伝統社会に対して、グローバルで動態的な「マクロコスモス」としてのキリスト教が介入したことによって、伝統的な社会システムは崩壊したとされる。以上の「ミクロな伝統宗教」対「マクロなキリスト教」というモデルに対して、レンジャーはこの構図を逆転させる可能性を提起する。

レンジャーはまず、20世紀以降の南部アフリカ社会において、宣教団が地域社会と「伝統」宗教を創造したという可能性を指摘する。彼によれば、前植民地期の南部アフリカでは共同体の境界は流動的であったのに対して、宣教団の多くは布教の対象として特定地域を指定し、とくに辺境を志向する傾向にあった。また、宣教団は在来社会の多様な宗教的実践のなかでも宣教師が「宗教的」とであると認める実践を選別し、分類した。さらに宣教団はイギリスの王室システムにならって王や首長の役割を固定化するとともに、住民を「部族」のカテゴリーへと囲い込み、集団の境界を越える運動を弾圧した。こうした固定化と弾圧によって、宣教団と植民地勢力は「ローカル化された宗教と共同体の存在を想像したのみならず、これらを創造した」のである [Ranger 1993: 72]。

つづいてレンジャーは、前植民地期のアフリカ社会と宗教に内在する動態性と開放性を指摘する。彼によれば、植民地化以前の南部アフリカ社会では民族同士の境界は流動的であり、民族的帰属を自在に変えることも可能であった。また、交易や狩猟を目的とする長距離の移動に伴って多様な集団が常に交流し、中心都市からフロンティアへの移動が行われていた。こうした頻繁な移動と集団間の交流を通して、次のような複数のネットワークと宗教共同体が形成さ

れた。a) 家族や地域社会を中心とする祖先崇拜カルト、b) 遠距離の聖地を結ぶネットワーク、c) 狩猟者のカルトとギルド、d) 隊商の交易ルートと結びついた憑依カルト。

したがって、前植民地期の南部アフリカでは個人の宗教的帰属やネットワークは地理的な広がりを持ち、特定の支配圏内に収まらない重層的なものであった。この状況を彼は「アフリカ伝統宗教のもつマクロ・コスミックな潜在力 (the macrocosmic potential of African traditional religion)」[Ranger 1993: 79] と呼び、19世紀以降の独立教会運動や妖術撲滅運動にみられる拡散性や混淆的な傾向は、先行研究が主張するように植民地化への反応として生じたのみならず、アフリカの在来宗教に独自の特徴であると指摘している。

レンジャーの考察によって、近代化論をはじめとする多くの先行研究が前提としてきた、「静態的でミクロな伝統宗教から動態的でマクロな世界宗教へ」という発展的移行モデルとは異なる分析と理解の可能性が示された。すなわち、辺境を志向し地域社会と住民の固定的な統合を試みる宣教団に対して、政治経済活動と連携して広汎に流通する混淆的な在来宗教という構図である。従来モデルとは逆転したこの構図を念頭において現代アフリカの宗教現象を考察してみると、ギフォード [1998] の報告している新カリスマ教会の発展や、ゲシェーレ [Geschiere 1997] の述べる「近代的」妖術現象の興隆について、先行研究とは異なる解釈の可能性が現われてくる。つまり、ポスト植民地期のアフリカ社会における実利的でグローバルな宗教現象の発展は、在来宗教の発展的移行の最新局面とされる世界システム/宗教への参入と同化としてのみならず、アフリカの宗教が本来的に兼ね備えた「マクロ・コスミックな潜在力」の発現として考えられるのである¹⁰⁾。

IV おわりに

本論では、1960年代以降のアフリカ宗教研究において重要な理論的潮流を形成してきた周辺化理論と近代化論を中心に、その論理展開と問題を検討した。最後に、アフリカ宗教研究の今後の課題を述べて本論の結びとしたい。

先述したように、構造的弱者の宗教実践を対象とする周辺化理論は、アフリカ宗教の機能的分析と理論化に貢献する一方で、宗教実践の意味と主体の立場をめぐる解釈学的問題を繰り返し浮上させてきた。また、ポスト植民地期アフリカ社会における宗教実践を近代化とグローバル化との関連から論じた近代化論は、現代アフリカの宗教と世界システムとの密接な関係を明らかにする一方で、ローカルな伝統宗教からグローバルな世界宗教へというアフリカ宗教の発展的移行モデルに依拠している。

周辺化理論に付随する解釈学的問題に対処し、かつ近代化論が前提とするアフリカ宗教の発展的移行モデルを超越するためには、少なくとも次のふたつの方向からの検討が必要であると

考えられる。第一に、植民地化以前から現在に至るアフリカ社会と宗教の変容過程を、局所的な政治経済変化との関係を含めて歴史的に検証することである。第二に、地域や世代、ジェンダーや社会階層による差異と格差をはじめ、現代アフリカ社会における宗教実践の多様性と内的差異を比較検討することである [cf. Ranger 1986]。このためには、次の三つのテーマが重要となると考えられる。

第一に、村落住民や女性、都市貧困層を主体とする流動的で拡散的な宗教実践の検討である。従来の周辺化理論では、女性や貧困層による宗教運動は社会経済的優位にたつ首位文化に対する対抗文化として、閉鎖的かつ画一的に描かれる傾向にあった。また、近年の近代化論は国家政治と結びついた都市中流層の宗教運動に焦点をあてているために、やはり近代化やメディアの影響下にあるはずの村落住民や女性、都市貧困層を主体とする宗教実践の展開については十分な検討がなされていない。しかし、たとえばケニヨン [1995] による都市ザール・カルトの事例やゲシェーレ [1997] の報告している監獄内の妖術者ネットワークの形成にみられるように、都市中流層の教会活動にかぎらず、より多様なレベルで越境的な宗教共同体の形成と、個人の宗教的帰属の選択や転換が生じていると考えられる。また、都市部のみならず村落部でも、個人的な移住や出稼ぎ、巡礼などによって住民は複数の社会的・宗教的共同体に帰属している可能性がある。したがって、社会的・宗教的帰属の選択可能性をもつ「近代的個人」の存立条件として都市化と近代資本主義経済への完全な参入を前提とするのではなく、レンジャー [1993] の指摘する意味での「重層的な個人」の形成と変容について、出自・ジェンダー・世代・生業等による個々人の差異に留意した総合的な検討が必要とされる。

第二に、宣教団を母体とする主流派教会と独立教会、および新たなペンテコステ派／カリスマ教会をはじめとする教会間関係の再検討である。アフリカ社会における宣教団の役割についてはこれまで、啓蒙と教育を通して現地住民を従属状況に馴化せしめる植民地主義の先兵とする見方が一般的であった。また、1970年代以降は霊性を重視する独立教会に対して、宣教団を母体とする主流派教会を近代合理主義精神の代弁者とみなす見地が主流を占めてきた。しかし、現代アフリカにおける教会宗派間関係は、従来の二項対立的な図式にはあてはまらない複雑な状況を示している。たとえば近年のペンテコステ派／カリスマ教会の活動についてみると、アフリカ人の信者が高等教育や欧米渡航の機会を求めて教会に参入するのに対して、欧米出身の宣教師はむしろ強固な千年王国の終末思想を抱いているという状況がありうる¹¹⁾。したがって、現代アフリカにおける教会宗派間の相互影響と差異について、宣教団を母体とする主流派教会、村落部に支持基盤をもつ伝統的な独立教会、都市部の新たなペンテコステ派／カリスマ教会、そして欧米資本に依存した新たな伝道教会のそれぞれを注意深く比較検討する必要がある。

第三のテーマは、先に述べた二つのテーマに関連している。すなわち、妖術や精霊憑依を

はじめとする在来の宗教実践と教会活動の双方を現代アフリカの文脈において総合的に検討することである。たとえば妖術と教会との関係についてみると、近年の妖術研究 [Fisiy & Geschiere 1996; Geschiere 1997] の指摘する「近代的」妖術発生の社会的背景は、新たなペンテコステ派/カリスマ教会勃興の理由として多くの研究者が指摘する社会的要因と重複している。すなわち、脱植民地化と都市化、資本主義経済化である。財の利己的蓄積と経済格差の拡大に伴う社会的緊張は妖術への恐れを増大させる一方、新たなペンテコステ派/カリスマ教会は妖術への対抗手段を提供するとともに利己的な蓄財を正統化する機能を果たしている。また現在、新たなペンテコステ派/カリスマ教会と妖術はいずれも実利的な力を獲得する手段として、地域や民族の境界を越えて大規模に展開している。したがって現代アフリカ社会において、妖術と教会は互いに拮抗し強化しあいながら、人・財・情報の広汎な流通に乗じて拡張をつづけていると考えられる。以上の関係が示すように、ポスト植民地期のアフリカ社会における宗教現象の動向と相互影響を理解するためには、在来宗教と教会を単線的な時系列上の異なる点に位置づけるのではなく、常に影響しあいながら変化する移行状態として分析する必要がある。

以上述べてきたように、今後のアフリカ宗教研究にとって重要となるのは、アフリカ社会と宗教実践の歴史的变化と多様性を重視し、異なる歴史的深度と起源をもつ宗教実践を総合的に比較検討した実証的研究である。このような視座こそが、従来の周辺化理論と近代化論の限界をこえて、常に変化しつづける重層的な宗教現象の活力を十全に理解し表現するに足る、マクロ・コスミックなアフリカ宗教論を構想するための新たな展望をひらくと考えられる。

謝辞：本論は、2002年に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士論文の一部と、1999年に同大学院文化人類学講座に提出した博士課程調査予備論文に基づいている。1999年から現在に至る調査研究は日本学術振興会の研究助成によって可能となった。また、京都大学人文科研究所共同研究班「フェティシズム研究の射程」および国立民族学博物館共同研究会「ポストコロニアル・アフリカ：その動向と課題」の口頭発表では、各研究会の代表者である田中雅一先生と竹沢尚一郎先生をはじめ、多くの先生方から貴重なご意見を賜った。ここに深く感謝申し上げます。

注

- 1) 本論が問題とする学問領域は人類学であるが、以下の文章では「サハラ以南アフリカの宗教実践を対象とする人類学的研究」の意味で、便宜的に「アフリカ宗教研究」という語を用いる。
- 2) 本論では検討の対象としないが、アフリカ社会を題材に象徴分析を行った代表的研究として Douglas [1966], Turner [1967, 1969] が挙げられる。象徴分析の近年の展開については van Binsbergen & Schoffeleers [1985], Ranger [1986: 5] 参照。

- 3) 静態的な社会構造の存在を前提としたルイス [1966] と不可逆的で大規模な社会変化を重視するケニヨン [1995] らの中間に位置する議論として、地域社会を対象とする可逆的な動態社会論が挙げられる。たとえば Turner [1957] は宗教儀礼による秩序の一時的解体と再生を基軸とする動態社会モデルを提出した。同じく社会構造と宗教実践の循環的な変遷を指摘した研究として Beidelman [1971], Rigby [1975] 参照。このような可逆的動態社会論への批判として Ranger [1985] 参照。
- 4) 同じく精霊憑依は男性中心の権威への抵抗ではなく、女性の価値の積極的提唱であるという観点から剝奪理論を批判した議論として Giles [1987] 参照。
- 5) 周辺化理論のみならず、民族誌記述における解釈と翻訳に伴う問題を指摘し、これに対する解釈学的批判を試みた議論としてマーカス [1996: 333-336] 参照。
- 6) ただし、抵抗形態の変容が権力構造の漸次的な転換の過程を明らかにする場合がある。権力構造の移行状況における抵抗形態の変容に着眼し、分析者による一義的な「抵抗のロマン化」を批判した議論として Abu-Lughod [1990] 参照。
- 7) アフリカ宗教の近代化論に連なる研究として、本論がとりあげたペンテコステ派教会研究に加えて、妖術や憑依現象を近代化とグローバル化との関連から論じた研究 [Fisiy & Geschiere 1996; Geschiere 1997; Behrend & Luig 1999] が挙げられる。
- 8) ハケットによれば、ガーナでは 1970 年代から 80 年代に「ペンテコステ派」教会が形成され、1970 年代以降は「カリスマティック」教会が普及したのに対して、ナイジェリアでは現在も「ペンテコステ派」という名称が一般的である。
- 9) またハケットは、アフリカ諸国の教会支部に対する欧米教会の影響力を指摘している。すなわち、欧米の教会本部にとってアジア・アフリカ諸国は宗教的な商品の市場として重要な位置を占めている。また、欧米に拠点をもつ教会の布教と宣伝活動は後期資本主義の国際的な情報システムによって管理されている。
- 10) ただしギフォード [1998: 335] はレンジャーと同じく、新カリスマ教会の特徴と伝統宗教の実利的傾向との共通性を指摘している。
- 11) 植民地期アフリカと母国における宣教師団の両義的な立場とジレンマを指摘した研究として Meyer [1999] 参照。

参 照 文 献

- Abu-Lughod, Lila 1990 The romance of resistance: tracing transformations of power through Bedouin women. *American Ethnologist* 17 (1): 41-55.
- Balandier, G. 1955 (1983) *Sociologie actuelle le l'Afrique Noire*. Presses Universitaires de France.
- (『黒アフリカ社会の研究 —— 植民地状況とメシアニズム』井上兼行訳: 紀伊国屋書店)
- Behrend, H. and Luig, U. 1999 Introduction. In *Spirit possession, modernity and power in Africa*. H. Behrend and U. Luig (eds.). pp. ix-xxii. The University of Wisconsin Press.
- Beidelman, T.O. 1971 Nuer priests and prophets: charisma, authority, and power among the Nuer. In *The translation of culture*. T.O. Beidelman (ed.), pp. 375-415. Tavistock Publications.

- Comaroff, J. 1985 *Body of power, spirit of resistance: the culture and history of a south African people*. The University of Chicago Press.
- Douglas, M. 1966 *Purity and danger*. Frederick A. and Praeger.
- Eliade, M. 1951 *Le chamanisme*. Payot.
- Evans-Pritchard, E. E. 1937 *Witchcraft, oracles and magic among the Azande*. Clarendon Press.
- Fisiy, C. and Geschiere, P. 1996 Witchcraft, violence and identity: different trajectories in postcolonial Cameroon. In *Postcolonial identities in Africa*. R. Werbner and T. Ranger (eds.), pp.193–221. Zed Books Ltd.
- Geschiere, P. 1997 *The modernity of witchcraft; politics and the occult in postcolonial Africa*. University Press of Virginia.
- Gifford, P. 1994 Ghana's charismatic churches. *Journal of Religion in Africa* 24 (3): 241–265.
- . 1998 *African Christianity: its public role*. Hurst & Company.
- Giles, L. L. 1987 Possession cults on the Swahili coast: a re-examination of theories of marginality. *Africa* 57 (2): 234–258.
- Hackett, R. I. J. 1998 Charismatic/Pentecostal appropriation of media technologies in Nigeria and Ghana. *Journal of Religion in Africa* 28 (3): 258–277.
- Kenyon, S. M. 1995 Zar as modernization in contemporary Sudan. *Anthropological Quarterly* 68 (2): 107–120.
- Lan, David 1985 *Guns and rain: guerrillas & spirit mediums in Zimbabwe*. University of California Press.
- Lanternari, V. 1963 *The religions of the oppressed*. Knopf.
- Lewis, I. M. 1966 Spirit possession and deprivation cults. *Man* 1 (3): 307–329.
- マークス, ジョージ 1996 (1986) 「現代世界システム内の民族誌とその今日の問題」『文化を書く』ジェイムズ・クリフォード/ジョージ・マークス編 pp.303–360, 春日直樹ほか訳: 紀伊国屋書店。
- Meyer, Birgit 1999 *Translating the devil: religion and modernity among the Ewe in Ghana*. Africa World Press, Inc.
- Ranger, Terence 1985 Religious studies and political economy: the Mwali cult and peasant consciousness in Southern Rhodesia. In *Theoretical explorations in African religion*. Wim van Binsbergen and Matthew Shoffeleers (eds.), pp.287–321. KPI Ltd.
- . 1986 Religious movement and politics in sub-Saharan Africa. *African Studies Review* 29 (2): 1–69.
- . 1993 The local and global in Southern African religious history. In *Conversion to Christianity: historical and anthropological perspective on a great transformation*. R. W. Hefner (ed.), pp.65–98. University of California Press.
- Rigby, Peter 1975 Prophets, diviners and prophetism: the recent history of Kiganda religion. *Journal of Anthropological Research* 31 (2): 116–148.
- Sharp, L. A. 1990 Possessed and dispossessed youth: spirit possession of school children in Northwest Madagascar. *Culture, Medicine and Psychiatry* 14: 339–364.
- Shoffeleers, M. 1991 Ritual healing and political acquiescence: the case of the Zionist

- Churches in Southern Africa. *Africa* 60 (1): 1-25.
- Stoller, Paul 1995 *Embodying colonial memories: spirit possession, power and the Hauka in West Africa*. Routledge.
- Taussig, M. 1980 *The devil and commodity fetishism in South America*. University of North Carolina Press.
- . 1987 *Shamanism, colonialism and the wild man: a study of terror and healing*. The University of Chicago Press.
- Turner, Victor 1957 *Schism and continuity in an African society*. Manchester University Press.
- . 1967 *The forest of symbols*. Cornell University Press.
- . 1969 *The ritual process*. Aldine.
- van Binsbergen, W. and Schoffeleers, M. 1985 Introduction. In *Theoretical explorations in African religion*. Wim van Binsbergen and Matthew Schoffeleers (eds.), pp. 1-49. KPI Ltd.
- van Dijk, R. A. 1997 From camp to encompassment: discourses of transsubjectivity in the Ghanaian Pentecostal diaspora. *Journal of Religion in Africa* 27 (2): 135-160.
- Worsley, Peter 1968 *The trumpet shall sound: a study of 'cargo' cult in Melanesia*. Granada Publishing Ltd.